

小説『ゴムと金属の剥離・溶解の事業共創』 ～高山章久物語～



(考え方を説明する高山代表)



(溶かす説明をする梅田社長)



(溶液の説明をする音成部長)



(ミニショベルのゴムクローラーは完璧に剥離・溶解出来ます)



(銅線の剥離・溶解も完璧にできます。銅線の商品価値を維持出来るのが特徴)



(工房での視察者への実験の説明)



(韓国からの視察者との記念撮影)

～人が物事を始める時動機がある～

『 motif marketing 』

小説『ゴムと金属の剥離・溶解の事業共創』

～高山章久物語～

20120年2月22日

一般財団法人自動車利用者保護機構

代表理事 山下 健樹

ラグビーワールドカップを日本で開催しようとい初めに言い出し行動した男がいました。奥勝彦元外務省の高級官僚です。

残念ながら彼は2003年11月イラク日本人外交官射殺事件で殉職してしまいました。

その後彼の意志が多くの人々を動かし、ラグビーワールドカップ日本大会が2019年9月20日～11月2日まで開催され、世界の多くの方々に感動を与えたことは記憶に新しいところです

10数年前ゴムと金属を剥離する技術を開発し、物流業者が製造会社になり再資源を活用して二次製品化迄の一製品一貫使いきる・小規模工場で作るべきだとい始めた男達があります。小規模モノづくり研究室高山章久代表と研究会の仲間達です。

その中に研究熱心で諦めない男がいました。株式会社エイコー代表取締役社長梅田忠弘と微生物活用事業部音成洋司です。

高山代表と二人の男は私財を投じてゴムと金属を剥離しゴムは溶解して再資源として利用できる全く新しい溶解技術を10年越しで完成させました。2019年7月の事です。

この溶解技術の凄いところは危険物薬品を全く使わず、人体に害がないということです。しかも燃やすのではなくて溶かすという技術ですから、資源を再利用する循環型社会が実現できるということです。

日本は2019年12月3日COP25で、地球温暖化対策に後ろ向きな姿勢の国に贈られる『石炭賞』という不名誉な賞を受賞しました。二酸化炭素の排出量が多い石炭火力発電の利用を続ける姿勢が授賞の理由でした。(他はブラジル、オーストラリア)

地球温暖化防止に関して、1997年主要先進国の政府代表者が京都に集まり、国際条約である『京都議定書』が採択されました。地球温暖化につながる温室効果ガスの削減目標を加盟国ごとに決めたのです。(その時の日本の目標は1990年を基準にして-6%)。

『石炭賞』の受賞は、『京都議定書』という国際条約を採択した国として残念で仕方ありません。

～使命感の芽生え～

戦後70数年日本は急速な復興と成長を実現しGDPは世界3位になりました。

輸出大国日本として繁栄したのです。

船・鉄・車・タイヤ等世界各地に輸出して貿易で儲けてきました。

国内にあっては大手のメーカーが生産したものを物流業者に丸投げし、消費者が使い終わったものは販売店が引き取り、使い終わった製品は廃棄物として産廃業者が回収し処分するという納品と引き取りの二つの複雑な物流構造が仕上がる結果になりました。

大手のタイヤメーカーの現場で指揮を取っていた高山は、複雑化する物流構造に疑問を持ち始めた。

高山の考えはこうだった。メーカーが製造したタイヤはタイヤメーカーの責任として物流業者と手を組んで商品の配送から廃棄物の回収までやるべきだろう。一方、廃棄されるタイヤは燃やさないで金属とゴムに分離・溶解し再資源として活用すべきだ。溶解した廃液は、駐車場のストッパーとか工事現場のゴムマット、防音壁、屋根瓦等が作れる。

二次加工品を作る製造工場は、設備投資が少なく済むように小規模にすべきだ。現在のやり方では物流コストはかさむばかりだ。

タイヤメーカーが作った物流の仕組みの片棒を担いだ者の一人として、何とか改善すべきだ。高山の胸の内に使命感が芽生えた。10数年前の事だ。

高山は直ぐに行動した。

賛同者を得るために、ある人材派遣会社と手を組み全国を飛び回って講演した。人材派遣会社と手を組んだのは、ゴムと金属の剥離・溶解をベースに人材派遣の新しい事業スキームを組み上げる狙いもあった。

だが金属とゴムを剥離・溶解し事業の共創理念に直ぐに飛びつく者はいなかった。

ゴムと金属を剥離しゴムを溶解するなんて燃やすのが主流の時代に逆行している。またゴムと金属を剥離し溶解する技術は劇薬を使ったとしても出来るはずがない。何年たっても剥離液・分離液はできっこない。理論上無理だ、と冷ややかだった。

しかし長年タイヤに携わった高山はおぼろげに出来ると思っていた。

幾重にも重ねて出来たタイヤの層は何かの液で溶けるはずだと思っていた。その液が何なのか分からない。液を発掘するための努力が必要だ。その液を発掘したら高山が理想とする事業の共創で循環型社会が出来上がる。萎える気持ちを何度も奮い立たせた。

ある時『面白そうなのでやってみましょうか？』声をかけてくれた男がいた。

株式会社エイコー代表取締役社長梅田忠弘である。実直そうで研究熱心そうに見えた。

梅田は平塚駅近くで整備工場を経営していた。

彼に声かけられ嬉しくなった。

『本当にやってくれるのだろうか？』少し不安があったのも事実である。

彼の会社に行くと音成洋司を紹介してくれた。音成は肉を熟成させる菌が専門で熟成ハムを作りデパートに高級ハムとして卸していたという。

『3人寄れば文殊の知恵』高山は3人でトライして見ようと決心した。

10 数年前の事である。

以来試行錯誤の日々が続いた。

高山は足繁く梅田の会社を訪問し繰り返し技術的な指導をした。

『理論上は剥離と溶解はできないことはない』高山の信念だった。

梅田と音成は会社に泊まり込む日もあった。

三人とも多額のお金も時間も労力も費やした。

梅田は銅線、廃棄タイヤが入ったドラム缶に、厭きもせずいろんな溶液を放り込んだ。

化学の記号はわからない。高山が教えるがままにかたっぱしから液を手にいれ何度何度も繰り返した。

梅田には諦めるという考えはなかった。高山理論で剥離と溶解ができれば凄いことになると思実験を楽しんだ。

ある時梅田が、ある液を実験用のドラム缶に入れ数日間放っておいた。

どうなったかな？と何気なくのぞくと、ゴムとタイヤが剥離し、ドロドロしたゴムの溶解した液がドラム缶に浮かんでいた。

『やった！！』梅田は少年のような声を上げ喜んだ。

金属とゴムを剥離しゴムを溶解する液を探し当てたのだ。

神様が降臨した。梅田はそんな心境だった。

2019年の初夏に向かうある日の事だった。

すでに10数年たっていた。

梅田は探し当てた溶液を使って銅線・タイヤの剥離・溶解の事業の目途がついた。

銅線、複写機駆動ローラ、廃タイヤ等ゴムと金属を剥離しゴムを溶解する2つの液の技術がほぼ完成したのだ。

2つの液は科学的な裏付けはない。化学の記号で表せない。梅田が長年かかって体得したものである。高山の元同僚でタイヤの研究室にいた技術者は鼻から信じてくれない。科学的な裏付けがない液でゴムと金属を剥離し溶解するなんてあり得ない。異口同音に言うせりふである。しかしながらゴムと金属を剥離しゴムを溶解する液を発見し、廃棄物を燃やすから溶かすに変え原料として再利用出来る目途がたったのは事実である。

折しも中国が銅線、廃タイヤ、廃プラスチック等の資源ゴミを輸入禁止したことで日本は困っている。一方圏央道が開通したことで物流業界も運ぶだけの役割から、再資源を処理する物流・製造業への業態転換が求められつつあります。まさに10数年前に高山が予見したことが現実味をおびてきた。

この流れの中で我々企業はどうやって勝ち残るか知恵と創造を働かせる時代だ。

～ゴムと金属の分離、剥離・溶解の開発・事業化の共創相手を求めて～

ゴムと金属の剥離・溶解事業はビジネスを展開する素材が生まれたばかりである。

『素材を使ってやりたい』と手を挙げてくれる企業を探している。

高山の根底にある事業スタイルは『共創』である。それぞれの立場の方々と対話しながら新しい価値を『共』に『創』作り上げていくことだ。

主体は物流業者だ。物流業者が旗を振って多様な立場の方々を集め、集まった方々と対話し

ながら新しい価値を『共』に『創』り若い世代にバトンタッチすることだ。

大手タイヤメーカーにおいて商品を物流業者に丸投げして複雑な物流の仕組みを作り上げた人間の一人として、物流業者主体の単純な仕組みで事業を構築すべきである、と高山は考えている。

高山の考えはスポーツに例えると駅伝だろう。一人で走るマラソンランナーではない。自分が作った仕組みをどのような形にして次世代へタスキを渡すかだ。まさに良い順位で次のランナーにタスキを渡そうと必死に走る選手に似ている。

私財を投じた高山に資金の余裕はない。梅田も音成も同じだ。彼ら三人にあるのは溶かす技術と、事業を成功に導く対話方式によるコンサルティングだ。

高山には事業を展開するアイデアがある。それは地方で廃校になった学校を借りて学校のプールにゴムと金属の剥離・溶解液を入れタイヤを放り込めば良い。タイヤはメーカーごとに添加材が微妙に違う。メーカーごとにプールを作ればいい。銅線だって複写機駆動ローラだって同じだ。液には害がないので身障者の方々の雇用にもつながる。原液は二次加工業者が買い取り、物流業者が工場まで運べばいい。二次加工業者は買い取った原液で駐車場のストッパー、工事現場のゴムマット、防音壁、屋根瓦等を作ればいい。

国が進める地方創生、身障者雇用促進、循環型社会が出来上がる。

この仕組みこそ次世代に渡す仕組みだ。高山は確信している。

SNS時代にあって高山の脳裏に背筋が寒くなる、ある情景がある。

それは発展途上国の原野に日本製の廃タイヤ、中古車等の資源ゴミが山積みされている情景がインターネットに流れている画像だ。すごい数だ。画像には日本の自動車メーカー、タイヤメーカーのロゴがアップされている。その画像と一緒に、日本はひどい国だ。私の国に使用できなくなったタイヤや中古車を捨てている。私の国はゴミ捨て場じゃない。ゴミを処分するのにお金がかかります。日本のメーカーの皆さん処分する費用を出してください。世界の皆さん日本はひどい国です。私たちの国に平気でゴミを捨てる日本から私達を守ってください。……例えばこのような画像がインターネットで流れたら日本は大変なことになるなど、妄想している。この情景が妄想であることを高山は祈っている。

一緒にゴムと金属の剥離・溶解の事業の共創相手になろうと思われる方ご連絡ください。一緒に若い世代のために、循環型社会を作り地球温暖化防止に取り組もうではありませんか。

【問い合わせ先】

一般財団法人自動車利用者保護機構

代表理事

山下 健樹

開発・事業化プロジェクトリーダー 高山章久

東京都千代田区岩本町1-4-7

TEL 080-5415-7798

メール yamashita@aup.or.jp